

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

2019年 8月 28日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 医学研究科

職 名・学 年 博士後期課程3回生

氏 名 黄 智 暎

助 成 の 種 類	2019年度 ・ 国際研究集会発表助成	
研 究 集 会 名	第21回国際美学会	
発 表 形 式	<input type="checkbox"/> 招 待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口 頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()	
発 表 題 目	Screenplay as a Medium: The Case of Truffaut's Works	
開 催 場 所	インド ニューデリー	
渡 航 期 間	2019年 11月 7日 ~ 2019年 11月 20日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	150,000円
	使用した助成金額	150,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助 成 金 の 使 途 内 訳	航空券： 99,620円
		学会参加費： 38,308円
滞在・宿泊費： 143,200円		
		(不足分は日本学術振興会特別研究員奨励費を使用)
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)	

成果の概要 / 黄 智暎

1. 国際会議の概要

学会名：第 21 回国際嗜癮医学会年次総会 2019

開催地：インド、ニューデリー

開催期間：2019 年 11 月 13 日~11 月 16 日（Pre-workshop は 2019 年 11 月 12 日に開催）

本学会は、国際嗜癮医学会（International Society of Addiction Medicine：ISAM）によって、1999 年から毎年開催されており、依存・嗜癮問題を包括的に取り扱った国際医学会です。第 21 回である今回は The World Psychiatric Association, World Association of Social Psychiatry, Indian Psychiatric Society および Indian Association for Social Psychiatry との共同開催でした。本年度の学会テーマは、“Addiction in a Rapidly Changing World”であり、嗜癮・依存症のリスクを高める社会文化的構造やその変化をグローバルな視点から捉え、予防・解決策を目指すことを目的としていました。

2. 研究発表の概要

私は、11 月 15 日（木）の Oral Communication 8 において、『日本におけるホームレスのギャンブル問題』に関する 2 本の研究を口述発表し、また同セッションにおいて司会を務めました。

この研究テーマに関する先行研究は数が少ないものの、先進諸外国では、ホームレスの人々にギャンブル障害（以下 GD）が多いことが報告されており、GD はホームレス化の原因の 1 つと考えられています。しかし、日本においては街中のパチンコやスロットなど、ギャンブルへのアクセスが容易な特異的社会環境があるにもかかわらず、この問題に関する調査は実施されたことがありませんでした。私が発表した研究の概要は以下の通りです。

演題 1 Prevalence of Gambling Disorder among Homeless People Recruited at Selected Facilities in Osaka city, Japan

1 つ目の発表は、大阪市のシェルターあるいは生活ケアセンターを利用するホームレスの人々における、ギャンブル障害（以下 GD）の有病者割合と彼らのギャンブル経験に関する量的研究です。2017 年に日本で実施された『国内のギャンブル等依存に関する疫学調査』と同じ構造化質問票にホームレス経験に関する質問項目を加え、2018 年 12 月 30 日から 2019 年 1 月 4 日の間、聞き取り調査を行いました。この研究においては、GD スケールである South Oaks Gambling Screening 5 点以上を GD と定義しました。

研究に参加した男性 121 名（回答者割合 35.4%）のうち、GD 該当者の割合は、生涯においては 42.1% (n=51)、過去 1 年間では 4.1% (n=5) と、全国調査の結果と比較して非常に高い状況が明らかとなりました。また、最もお金を費やしたギャンブル種目はパチンコ・パチスロが 72.5% (n=37) と圧倒的に多く、ギャンブルへのアクセシビリティが高い日本の社会環境が影響している結果と考えられました。一方で、GD に該当した 51 名のうち、専門家に支援を求めた経験がある者は 13.7% (n=7) に過ぎず、必要な支援を受けられていない人々の存在が課題と考えました。

演題2 Gambling-Related Problems and Homelessness : An Exploratory Qualitative Study in Osaka city, Japan

2つ目の発表は、大阪市にある3つのホームレス支援団体を通じてリクルートした、72名のホームレス男性に対する半構造化個別インタビュー調査であり、彼らのライフヒストリーとギャンブル経験がどのように関係しているのかを探索した質的研究です。この研究においても South Oaks Gambling Screening 5点以上のものをGDと定義しました。

研究参加者72名中、GDに該当した者は、生涯では41名(57%)、過去1年間においては5名(7%)あり、GD該当者の語りから、ギャンブルは個人が内包する問題を複合的に悪化させ、ホームレス化のプロセスに直接的あるいは間接的に影響を及ぼしていると考えられました。

52名(72%)は過去1年間においても習慣的にギャンブルを行っていましたが、ほとんどの参加者はGDに該当しませんでした。ホームレス生活におけるギャンブルは、所持金の少なさ、借金ができない状況、社会的孤立等の理由から、GDスケールでは測れない問題のあり方となっており、ギャンブルは孤独な彼らに安全な居場所を提供し、彼らが持て余す時間を消費する方法として利用されていました。また、経済的苦境を打破する目的でギャンブルが利用される場合もあり、ギャンブルとホームレス状態・貧困は相互に影響し合っていると考えられました。

3. 学会参加の成果

学会の演題は薬物・アルコール依存症に関するものが多かったのですが、私が発表した研究については、アメリカやヨーロッパの研究者から関心を寄せられました。量的研究の発表後の質疑応答では、GDがホームレス化の原因であるかが議論となり、質問に答える形でホームレスの人々は自殺率や併存精神疾患を持つ者の割合も高いことを説明しました。また、ギャンブルがどのようにホームレス化を引き起こしているかについての質問には、質的研究の発表をもって回答としました。いくつかホームレス化の典型的なパターンを示し、ギャンブルが彼らのコーピングに用いられている状況を説明した際には、深くうなずいている研究者も見られました。日本においては、ホームレスの人々はマイノリティとして特別視されることが多かったのですが、本学会の会場の研究者からはホームレスの人々は依存症や嗜癖問題を抱えやすい脆弱な集団であるという共通理解がすんなりと得られたことに驚きました。今後、この2本の研究を執筆・投稿するにあたり、このようなディスカッションは貴重な経験であったと考えます。

また、本学会では多岐にわたり、依存症や嗜癖に関する最新の研究の動向を知ることができました。とりわけ私にとっては、インドにおける依存症・嗜癖問題およびその治療に用いられているインド伝統医学が大変興味深く、機会があれば将来、インドの依存症・嗜癖問題にも研究者として関わってみたいと思いました。

謝辞

最後になりますが、今回のインド渡航は自身の研究活動の幅を広げるうえで、大変有意義なものとなりました。貴財団からのご支援に深く感謝申し上げます。